

1 保育で願う豊かな学びの姿

本園では、子どもたちが興味をもったことに対し、夢中になって心ゆくまで遊ぶ中で、今まで経験したことを遊びに取り入れたり、取り入れたものをイメージに合わせて変化させ、遊びをさらに発展させたりして欲しいと願っている。さらに、友だちと互いのイメージや考えを伝え合い、自分たちの力で遊びを創りあげて欲しいと願い、保育で願う豊かな学びの姿を次のようにまとめた。

- 興味・関心をもち、主体的に環境に関わって、疑問や不思議さに出会う姿。
- 試行錯誤しながら気付いたり、考えたり、工夫したり、確かめたりする姿。
- 自らみつけたこと・考えたことを友だちと言葉で伝え合いながら、目的や課題意識をもって遊びを広げたり深めたりしようとする姿。
- 友だちと目的を共有して、考えを出し合ったり相手の考えのよさを受け入れ合ったりしながら共同して実現しようとする姿。

本園では、子ども同士の関わりが、自分とは違う視点や考えとの出会いや、さらなる興味の広がりにつながると考えている。さらに、子ども同士が関わって遊んでいく中で、新たな考えを取り入れること、互いのよいところを受け入れ合い、共に遊びを創っていくことを大事にしている。また、一貫教育の観点から、このような子ども同士の関わりが、小学校以降の学び合いにもつながっていくことを見据え、研究を進めている。

2 保育における思考力・判断力・表現力とは

私たちは、保育における思考力・判断力・表現力を、小学校以降の素地となることも鑑みて、次のようにとらえている。

- 思考力・判断力…自ら興味をもって環境に関わり、自分の願いを実現するためにどうすればよいか考えたり選択したりする力。
- 表現力…感じたことや考えたことを自分なりの方法で表したり言葉で伝え合ったりする力。

願いをもちそれを実現しようとする過程で、子どもは様々なことを試しながら思考し、それが遊びの姿として表れてくる。個々の子どもの気付きや感動・願い・疑問などは、他の子どもたちも共有していくことが重要である。友だちの共感や提案を受けて、新たな気付きや意欲が生まれるからである。このように、自分でみつけた遊びと共有する活動がスパイラルにつながっていくことで、子どもは好奇心や探究心をもち、思いを実現しようとするより強い願いをもち、試行錯誤を繰り返す。このような過程の中で、思考力・判断力・表現力はより高まっていくと考えている（図1）。

私たちは日々の子どもの姿や言葉の記録をもとに、子どもの変容や思考力・判断力・表現力の高まりを分析する。子どもの姿は前日と大きく変わる場合もあるが、思考力・判断力・表現力の高まりはすぐに姿として表れるものではない。そこで、期を通して子どもの姿を分析し、その結果を次の期の構想へと生かしている。一人一人の幼児の発達に対する理解を深め、保育をよりよいものに改善する手掛かりとしては、「見取りと価値付けの観点」を設定することにした。「見取りと価値付けの観点」は、予想されるそれぞれの遊びや活動において、子どもの育ちに特に深い関わりがあると思われるものを、子どもの姿として表したものである。この「見取りと価値付けの観点」を明確にもつことで、はたらきかける場面や取り上げる課題が明確になり、より適切なはたらきかけができるようになると思う。

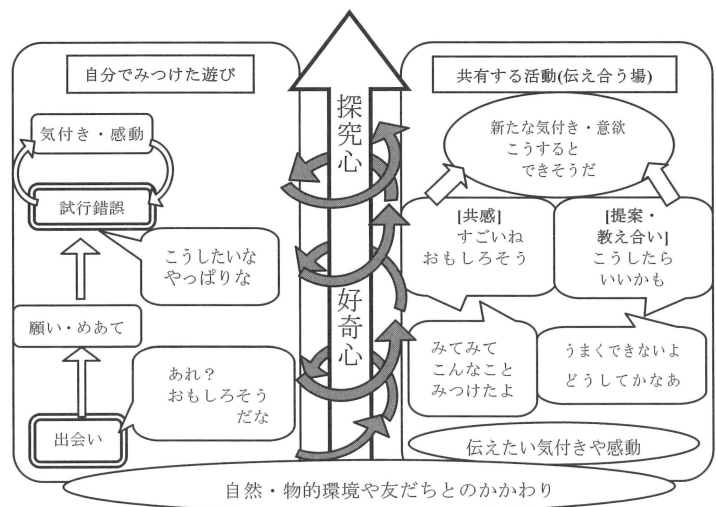


図1：思考力・判断力・表現力の育ちの過程

3 思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 気付きや経験をいかす

「1 保育で願う豊かな学びの姿」で述べた、子ども同士のかかわりのことを踏まえ、「気付きや経験をいかす子どもの姿」の具体を次のように考えている。幼稚園では、子どもたちが思い付いたことを試し、試しながらさまざまなことに気付いて遊びを面白くしていこうとする姿や、以前の経験を思い出し、遊びに取り入れる姿がある。また、友だちのしていることを見て同じように遊びに取り入れようとしたり同じように行動しようとしたりする姿もある。これらのように、「友だちとの関わりを通して気付いたことや経験したことを基に、自分の願いを実現しようとする姿」を「気付きや経験をいかす子どもの姿」とした。子どもの発達を踏まえ、年長では「友だちと一緒に考えを出し合いよりよいものをもとめる姿」に、年少では「友だちのよい考えを遊びに取り入れる姿」に視点を当てて研究を進めている。

幼児期の子どもは、思いはあってもうまく表現できなかつたり行動に移せなかつたりする場合があります。思い描いたイメージを実現させるだけの技量をもち合わせていない場合もある。このような場合、手を貸したり励ましたりするなど、思いを実現させるようなはたらきかけが必要である。思いをうまく表現できるようになってきた子どもに対しては、課題を解決できそうな以前の経験を提示したり、思い出したりするような声かけをしたりするなどして、以前の経験を課題解決や遊びの発展へといかせるきっかけをつくる。このように、子どもの発達や必要感に合わせ、はたらきかけていくことで、気付きや経験をいかす姿や、願いが実現したという満足感が生まれ、さらに遊びを発展させようとする意欲が生み出されると考える。

(2) 学び合い

学び合いは、子どもが主体的に展開していく活動の中で見られるものである。そこで、「共有する活動（伝え合う場）」（以下、「共有する活動」とする）や行事と、自分でみつけた遊びとのつながりを大事にした。共有する活動では、自分でみつけた遊びの中での個の気付きや感動などを、子どもが友だちを呼び集め伝えたり、教師が取り上げ、学級全体に広げたりしている。また、運動会や「こどもまつり」などの行事を、普段の遊びを取り入れながらどのようにつくっていくかということ、子どもたちと教師がともに話し合っている。このように、それぞれの活動のつながりをつくり出す共有する活動のあり方を探ってきた。

共有する活動では、子どもが主体的に展開していく活動となるよう、子どもの必要感を大切にしている。子どもが思いを伝えたい相手は、教師から仲のよい友だち、学級全体へと次第に広がっていく。そこで、共有する活動も最初は少人数であることが多い。そして「学級のみんなに伝えたい」という思いを子どもがもつようになるに従って、学級全員の共有する活動も多くしていく。なお、生活のルールのことなど、子どもたちみんなが必要感をもって参加できることは、子どもが思いを伝えたい相手に関わらず、学級全員で共有していく。また、「学級の友だちみんなに伝えたい」という気持ちをもてるよう、自分でみつけた遊びでの発見や面白い遊びそのものを学級のみんなで体験することで共有する場も、教師が意図的に設定するようにしている。そして、子どもたちの意識が学級の友だちみんなに向かうにつれ、友だちが困っていることを解決する方法や、こどもまつりをどのようにしていくかなど、一つのことに学級のみんなで向かえるような課題を多く取り上げていく。

(3) 教師のはたらきかけ

共有する活動の中で、子どもたちが自らの気付きや考えを意欲的に伝え合い学び合っていくためには、教師がどの言葉を取り上げ、どのような気持ちに目を向けられるようにするか、それぞれの遊びや活動の状況に合わせてはたらきかけていくことが重要である。そこで、私たちは、次のような教師のはたらきかけを大切にしている。

一つ目に、子どもの発言を要約したり周りの子どもに分かる言葉で言い直したりして、子どもの言葉をつなぐことである。子どもが思いをうまく表現できない場合は、子どもの思いを読み取り代弁する。

二つ目に、多様な視点につながるよう、さまざまな気付きや考えを取り上げることである。このことは、伝え合いが活性化するとともに、少数派の友だちの気持ちにも目を向けることにつながると思う。

三つ目に、子どもの主体的な動きの原動力となる、「気持ち」や「願い」に目を向けられるような言葉をかけていくことである。幼稚園では、子どもが意欲的に考え、学び合うときには、「誰かのために～してあげたい。」という気持ちや「どうしても～したい。」という強い願いをもっていることが多い。例えば、生き物を大切にしたいという思いから飼育方を考える、わずかな雪でかまくらを作りたいときに協力するといったことである。子どもたちの願いの中から、どの願いを共有していくかは、そのときの子どもの必要感や個々の子どもの発達、期のねらいなどを考慮していく必要がある。

(文責 内田 祐)